

令和7年度大田区議会区政施策調査 概要

◆期間 令和7年11月3日（月）～11月7日（金） 5日間

◆訪問都市 オーストラリア連邦西オーストラリア州 パース都市圏ジューンダラップ
市・パース市・コバーン市、ロットネスト島

◆団員 団長 鈴木 隆之 副団長 大橋 たけし 団員 大森 昭彦
団員 柿島 耕平 団員 須藤 英児

◆行程

	月日	都市名	スケジュール
1	11月3日(月)	東京(成田) 発 パース市 着	全日空881便(エコノミークラス)
2	4日(火)	ジューンダラップ市	ジューンダラップ市庁舎訪問 現地校(Kinross College)訪問 ホームステイ先訪問
3	5日(水)	ロットネスト島	ロットネスト島調査
4	6日(木)	コバーン市 パース市 パース市 発	現地校(Lakeland Senior Highschool)訪問 日本国総領事館訪問 パースのまちづくり、無料バス、熱波対策調査 全日空882便(エコノミークラス)
5	7日(金)	東京(成田) 着	

◆経費等

(1) 議員5人分、随行1人分 計5,661,773円

内訳 (1人あたり 943,629円)	航空賃など交通費、 視察経費他	744,920円	航空賃、空港税、空港施設使用料、 現地車賃、通訳料、添乗員同行費用他
	宿泊料他	166,000円	宿泊料金、食事料金(昼・夕)
	宿泊手当他	32,709円	宿泊手当、渡航雑費等

(2)宿泊ホテル

ノボテル パース ラングレー (3泊)

はじめに

団長 鈴木 隆之

令和7年11月3日から7日までの5日間、オーストラリアパース市、およびジューンダラップ市へ5名の議員派遣団として市長表敬訪問、並びに現地調査を行った。

大田区では外国の生活や文化を深く理解し、外国語（英語）の習熟を図り、国際社会において信頼を得られる人間性豊かな生徒を育成するためとし、昭和49年より大田区立中学校生徒海外派遣を実施している。

昨年までは本区の姉妹都市であるアメリカ合衆国マサチューセッツ州セーラム市、並びにドイツ連邦共和国のブレーメンに、区立中学校2年生56名を12日間派遣していた。

ドイツ連邦共和国からオーストラリアに変更した理由としては、本事業は好奇心あふれ意欲ある生徒たちにとって実りある事業として実績を積んできたが、数年前の新型コロナウイルスが猛威を振るった際には、残念ながら訪問を見送る事態となった。

その際に学校現場においてもリモート学習が行われ、webを通じた学びやコミュニケーションの重要性を認識することになった。

かつて海外派遣で出会ったホストファミリーや現地でできた友人などと、リアルタイムでのwebを通じた交流を行う際にも、セーラム市との14時間の時差は課題であった。

一方でオーストラリアとは時差が1時間ほどであり、今後のwebを通じた交流や情報交換などが行いやすい環境が整うこともあり、関係各訪問先の方々のご尽力により、ご縁あってジューンダラップ市との関係が構築され、今回初めての派遣へと繋がった。

7月6日には池上会館において参加生徒による結団式が行われ、入念な準備と抱負を聞くことができた。帰国後の10月26日には同会場にて報告会が行われ、現地での様々な体験や感じた想いが英語で披露され、学習の成果はもちろんのこと、一回り成長したたくましい姿が見られたことは非常に嬉しく、いかに実りある訪問であったかを伺うことができた。

それらを踏まえ、現地での具体的学習内容の調査、受け入れ自治体の教育方針や市長訪問にはじまり、まちの治安、緊急医療の充実度合いなど、実際に生徒が滞在する実情を把握するための今回の訪問となった。

今回は成田空港からパース国際空港までの直行便を利用し、10時間弱のフライトを経て現地に到着した。

今回の最初の目的は新市長への表敬訪問と、安全面を第一とした今後の本区生徒の受け入れ体制の拡充を伝えることであった。

生徒が派遣されていた時期はアルバート・ジェイコブ氏が市長を務めていたが、その後勇退が表明され、この度新たに2021年から北中部地区の市議会議員を務めていたダニエル・キングストン氏が新たに市長に就任された。

訪問当日、新市長からあたたかい出迎えを受け、議場を見学しながらの意見交換となつた。市長も教育に関してはご自身の重要政策として位置付けており、海外派遣の重要性と生徒たちの未来に関しての展望を確認することができた。

その後庁舎内で場所を移し、所管課の職員だけではなく、警察官数名も加わり、防犯カメラに重点を置いた治安維持に関して報告を受けることができた。

同日、実際に生徒を受け入れていただいたご家庭 2 か所を訪れ、訪問時の生活の様子や生徒たちの学びの姿勢などを伺うことができた。

また、生徒たちがお世話になった現地校を訪れ、学校の教育方針に始まり、教育プログラムや個性を伸ばす様々な取り組みに関しても貴重な意見を伺うことができた。

そして 3 日目には生徒も体験学習を行ったロットネスト島を訪れた。

この島は自然保護区に指定されており、幸せな動物として知られる有袋類、クオッカが生息していることで年間を通じて大勢の観光客が訪れる場所である。

そして最終日には、今後の生徒の受け入れ態勢拡充のため別の現地校を訪れ、その学校特有の教育プログラムの他、力を入れて取り組んでいるインクルーシブ教育等の視察を行った。

そして最後の行程として日本国総領事館を訪れ、首席領事からパース市をはじめ近隣の現状の説明をいただいた。

パース市やジューンダラップ市は治安が良好なことで知られているが、それはあくまで諸外国と比較したことであり、日本においての日常の生活とは異なることは現地で生活する上で常に認識をしておく必要がある。パース市及び近郊に関しては凶悪犯罪が少ないものの、車上荒らしなどは頻繁に起こっており、それらが凶悪犯罪につながる恐れもあるため留意が必要である。

また、事件が発生をした際に通報をした場合においても、緊急性が高くないと判断をされた場合は警察の出動を見送ることもあるため、その点は注意が必要とのことであった。

生徒が数週間生活をする上での日常の危険性に関して伺うと、滞在がホームステイであるため常にホストファミリーと共にしていることから、過剰な対策までは必要はないとのことであった。また、医療体制に関して伺うと、まずは近隣のクリニックに行き、必要に応じて大きな病院へ送られるとのことで、その点は日本と同様であった。

緊急医療体制に関してはそれぞれの病院で救急車を有しているので問題はないが旅行者は約 100,000 円の費用負担がかかるので、事前の保険加入が非常に重要であるとのことであった。本区においては来年度以降も継続的に生徒を派遣することを伝えると、首席領事からは事前に日程や人数などの概要を伝えてくれれば、領事館側としても情報を共有しておくとのお言葉をいただき、非常に心強く感じた次第である。

そして今回の訪問に際してもう一つの目的は、生徒派遣の際 JTB と協力して全ての対応に当たってくれた現地法人である GOLD 社の調査であった。

緊急時の対応や支援体制を含め、今後も安心して派遣を任せられるか、今回の生徒派遣を

振り返り、行動と共にしながらヒアリングを行い、意見を交わしてきた。

GOLD 社は派遣生徒の受け入れを主力業務としており、パース近郊の旅行代理店において、その分野においてシェア 60%ほどを占めているとのことであった。

また、日本からの到着が平日の場合、しばらくの間は友人と一緒にいれることにより気がまぎれるが、到着が週末になった場合にはそのままホストファミリーと一緒になるため、ホームシックになるケースがあり、その場合の生徒との対面においてのケアによる対処法も持っており、この分野においての長年の実績とノウハウの蓄積があることが確認でき、本区との更なる連携の構築が期待できると感じた。

今回の訪問を振り返り、本区の子どもたちが日本を出て広い視野で見聞を広め、国際人として世界に羽ばたくために、改めて生徒海外派遣の重要性を認識する視察となつた。

この度の区政施策調査を行うにあたって綿密な調整をいただいた関係各訪問先の方々に改めて感謝するとともに、今後も生徒海外派遣になお一層のお力添えをお願いする。

ジューンダラップ市長表敬訪問・市の CCTV 助成事業について

団員 柿 島 耕 平

はじめに

本報告書は、令和 7 年 11 月、西オーストラリア州パース首都圏に位置するジューンダラップ市を訪問し、ダニエル・キングストン市長への表敬訪問ならびに、同市が推進する CCTV（防犯カメラ）設置補助制度の視察結果をまとめたものである。今回の訪問は、大田区の中学生海外派遣事業において、同市が初めて受け入れを行ったことを契機とし、今後の国際交流や防犯分野での先進的取組を探る機会となった。

1. ジューンダラップ市の概要と市長就任の背景

ジューンダラップ市はパース中心部から北へ約 20 キロメートルに位置し、豊かな自然と都市機能が調和した人口約 17 万人の自治体である。面積は約 99 平方キロメートルと州内でも大規模で、地域総生産（GRP）は約 82 億豪ドルに達し、約 1 万 3 千の企業が活動するなど経済基盤も強固である。主要産業はヘルスケア、教育、サイバーセキュリティ、観光産業など多岐にわたり、約 5 万 8 千人の雇用を支えている。

また、市内には 300 以上の公園や自然保護区、17 キロの海岸線が整備され、大学や図書館、レジャーセンターといった文化施設も充実している。治安が良く教育水準も高いため、今年度の大田区中学生海外派遣を初めて受け入れていただいた際にも、生徒が安心して学び多くの刺激を受けることができた。このような健全な都市環境は、大田区が目指す「安全で学びのある地域社会」と方向性を同じくしており、継続的な交流の意義は大きいと考える。

市長のダニエル・キングストン氏は 2025 年 10 月に就任した新しいリーダーで、住民協働、行政の透明化、財政健全化を重視する姿勢が評価されている。公式発表では「透明で説明責任を果たす行政」「すべての郊外への公平な成果」を掲げ、防犯対策や公共空間の改善を推進している点は、大田区が取り組む安全・安心のまちづくりとも高い親和性を持つ。



ジューンダラップ市庁舎正面玄関

2. 市長表敬訪問の概要

表敬訪問はジューンダラップ市役所にて行われた。キングストン市長は就任直後という多忙な時期にもかかわらず、温かく代表団を迎えてくださった。面会は短時間ではあったが、大田区の中学生派遣事業を初めて受け入れていただいたことへの感謝を申し上げるとともに、今後の交流継続について謝意を伝えた。これに対し、キングストン市長からは



議場内でキングストン市長との撮影

「若い世代が国際的な視野を持ち、文化的なつながりを築くことは大変意義深い」との趣旨の言葉があり、終始和やかな雰囲気の中で記念撮影が行われた。

市庁舎は開放的で現代的な設計がなされており、住民が利用しやすい行政空間として整備されている点も印象的であった。キングストン市長の誠実で柔らかな対応からは、市政運営における「住民との対話」を重んじる姿勢がうかがえた。

今回の訪問を通じ、同市が大田区と同様

に「地域との協働による行政」を重視していることを実感した。

3. CCTV 補助制度の概要と導入経緯

市長との面会後、場所を移して説明セッションが開かれ、市職員に加え、西オーストラリア州警察の担当官、ネットワーク・セキュリティのアナリストも同席した。制度創設の背景、犯罪抑止効果、技術要件、データ管理、住民周知の方法などが、行政・警察・技術専門家の三者から説明され、防犯カメラ制度が行政単独ではなく治安当局と専門家の連携で運用されていることを確認できた。これらの知見は大田区の取組を検討するうえでも有益であった。

ジューンダラップ市の「CCTV 補助制度」は、犯罪抑止と安全性向上を目的に、防犯カメラ設置費用の一部を住民に補助する仕組みである。制度は 2022 年 12 月に提案され、翌年 3 月に導入された。「21 世紀型ネイバーフッド・ウォッチ」と位置づけられ、行政が主導するのではなく、住民の自主的な安全活動を支援する点に特徴がある。

申請はオンラインで行い、クラス 2 ライセンスを持つセキュリティ企業の見積取得、3 メガピクセル以上の解像度、31 日録画、赤外線撮影、有線接続などの基準を満たす必要がある。設置後は 50% の顔認識テストをクリアし、西オーストラリア州警察の「Cam-Map WA」に登録すると、設置費用の 50%（上限 500 豪ドル）が補助される。初年度予算 10 万豪ドルに対して 456 件の申請があり、市の支出は 14 万 7 千豪ドル、総設置費用は 68 万豪ドルを超えた。市は設置場所を地図化し、犯罪発生状況と照合することで、地域の安全度分析やホットスポットの把握に活用している。

4. 警察との連携と技術的特徴

本制度の大きな特長は、州警察との緊密な連携体制である。市は住民のカメラ映像に直接アクセスする権限を持たず、警察が法令に基づいて必要な場合にのみ映像を利用できる。警察担当者によると、CCTV の存在は犯罪の「抑止効果」が特に大きく、侵入窃盗や器物損壊などの発生率を大幅に減少させているという。警察官が常時装着するボディカメラの映像や、デジタル証拠管理システム（DEMS）との連携によ



CCTV 補助制度についてのプレゼンテーション

り、証拠収集や事件解決までの時間も短縮されている。

また、警察は顔認識技術に加え、服装認識などの AI 分析も導入しており、犯罪発生時の容疑者特定に活用している。これらのデータは厳格なプライバシー法と倫理基準のもとに管理されており、住民の同意がない限り第三者が閲覧することはできない。こうした透明性と法的整合性が制度の信頼性を支えている。ジューンダラップ市の職員によれば、プライバシー懸念を和らげるため、制度趣旨を「監視」ではなく「地域の安全を守る自助の仕組み」として丁寧に説明しているとのことである。

5. 広報・運用改善と今後の展望

制度導入初年度は広報に重点を置かず、申請数は伸び悩んだが、二年目以降はソーシャルメディアやニュースレター、市民掲示板、警察との協働キャンペーンを通じて周知を強化した。その結果、設置件数は年末にかけて急増している。マーケティング戦略の強化と併せて、住民の信頼を高める工夫が功を奏した形である。

また、市はオーストラリア・ニュージーランド警察諮問機関（ANZPAA）の推奨基準を導入し、技術仕様を明確化するとともに、申請プロセスをより簡易化する改善を進めている。さらに、犯罪発生率の高い地域を対象に重点的なキャンペーンを実施する計画もあり、制度の持続的な発展が期待される。

おわりに

ジューンダラップ市が実施する CCTV 補助制度は、地方自治体が住民主体の防犯体制を構築し、警察と連携しながら地域の安全性を高める新しいモデルとして高く評価できる。特に、自治体が映像データを直接管理せず、あくまで住民の自主的な防犯活動を支援する立場に徹している点は、プライバシー保護と実効性を両立させる制度設計として示唆に富む。

オーストラリア・パース都市圏、近郊学校視察報告書

団員 柿 島 耕 平

はじめに

本視察は、大田区とオーストラリア・西オーストラリア州ジューンダラップ市との国際交流の一環として実施したものであり、現地の教育制度や学校運営の実情を把握し、今後の教育行政施策の参考とすることを目的としたものである。視察団は令和7年11月4日（火）にジューンダラップ市の「Kinross College」を、同月6日（木）にコバーン市の「Lakeland Senior High School」を訪問した。両校とも、教育の質の向上と生徒の多様な成長を重視しており、特にKinross Collegeは本年度、大田区の中学生海外派遣事業で生徒を受け入れた学校でもある。

1. Kinross College

Kinross Collegeは、ジューンダラップ市に位置する中等教育機関であり、7年生から12年生までの6年間一貫教育を行っている。現在約1,080名の生徒が在籍し、学問とスポーツの両立を重視する学校として地域から高い評価を得ている。優秀な生徒を対象とした「ギフテッド・アンド・タレンテッド・エデュケーション（GATE）プログラム」に加え、学習支援が必要な生徒への個別対応も整備しており、学力・環境・



学校前でWalia副校長と撮影

背景の異なる子どもがともに学ぶ「共生型教育」が実現されている。

教育理念の中心には「ウェルビーイング（精神的健康）」の概念が据えられており、「心が安定していれば学びは自然とついてくる」という信念のもと、メンタルヘルスの維持を最優先している。副校长によれば、学業のみを過度に重視することは生徒に過剰なプレッシャーを与え、逆に成果を損なう場合もあるという。そのため、教員・保護者・生徒の三者が一体となり、互いのコミュニケーションを密にしながら成長を支援する体制が確立されている。特に上位クラスの生徒ほど家庭からの期待が大きく、時に精神的な負担を抱えることもあるため、カウンセリングを含めた心理的支援にも力を入れている。

授業では「明示的教育法（Explicit Teaching）」が広く導入されている。これは「I do（教員による模範）」「We do（共同実践）」「You do（生徒による自立実践）」の三段階で構

成され、教員が手本を示し、段階的に生徒が自らの力で理解を深める手法である。この方法により、生徒が“なぜ学ぶのか”を主体的に捉え、自信をもって学習に取り組む姿勢を育成している。教育の透明性と再現性を高める点でも極めて効果的であり、教育の個別最適化に資する仕組みであると感じられた。

Kinross College では、教員の質の高さも特筆に値する。かつて教育長が一括して教員を配置していたが、現在は学校が独自に教員を採用しており、教育理念や校風に合った人材を選定できる体制に改められている。副校长自身もかつて国語教育部門の責任者として、明示的教育法の実践・研修を指導してきた経験を有し、理論と実践の双方を兼ね備えたリーダーシップを発揮している。

また、Kinross College は理論教育にとどまらず、実践的な学びを重視する。航空業界志望者を対象とした「Aviation Academy」では、約2万5千ドルのフライトシミュレーターを用いた操縦訓練を行い、実際の飛行訓練への準備が整えられている。さらに、来年度からはゴルフアカデミーが新設され、既存のバスケットボール、サッカー、ネットボールなどと並ぶスポーツ系プログラムの拡充が予定されている。こうした多様なアカデミーの整備は、生徒が自らの関心に基づいて進路を設計できる環境づくりの一環である。

施設見学では、金属加工、木工、溶接、レーザーカッター、3Dプリンターなどの設備



学校内の視察・写真は木工作業室

を備えた実習室を視察した。メカトロニクスや電気回路設計、プログラミング(C++)など、科学技術教育の裾野が広く、早期から理数系への関心を引き出す仕掛けが随所に見られた。生徒は自らの手で作品をつくりながら問題解決能力を磨いており、理論と創造性の融合を体現していた。

視察団として特に印象的であったのは、学校全体に流れる「生徒を信じ、見守る文化」である。成績が一時的に低下した生徒に対しても、すぐに下のクラスに落とす

ではなく、改善の機会を二度与える仕組みが設けられている。この間、教師が個別にチューターをつけるなど、成長の過程を丁寧に支援している。こうした教育方針は、「失敗から学ぶ力」を重視するオーストラリア教育の象徴であり、学びの本質に立脚した柔軟な姿勢として高く評価できる。

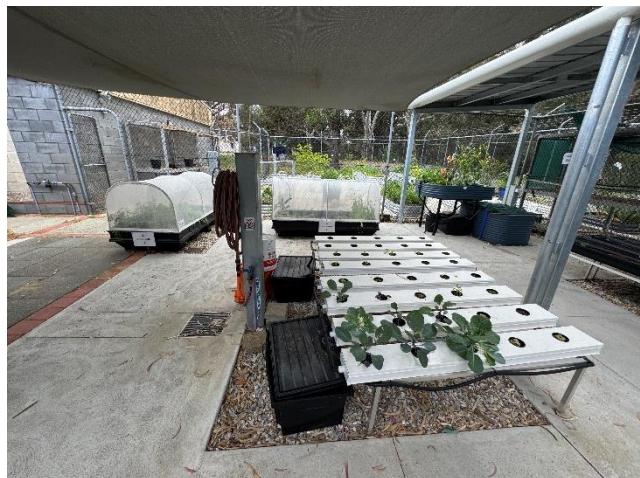
今回の訪問では、区議会として派遣事業を通じた交流に対する感謝を伝えるとともに、今後の協力体制の継続を確認した。現地からは「日本の生徒は礼儀正しく、積極的で、学校全体に良い刺激を与えていた」との言葉が寄せられた。こうした国際的な交流の積み重ねは、次世代の子どもたちにとって、異文化理解や多様性尊重の精神を学ぶ貴重な経験と

なるものである。

2. Lakeland Senior High School

Lakeland Senior High School は、パース都市圏南部のコバーン市に位置し、地域に根ざした公立高校である。生徒の約 20%がアボリジニの出身であり、多文化社会の中で包摂的教育を実践している。学校は地域の経済格差を背景に、限られた資源の中で「誰一人取り残さない教育」の実現を掲げている。

学校の特色として、職業教育と環境教育の融合が挙げられる。生徒が自ら設計したキッチンカーで料理を提供する「フードトラックチャレンジ」や、水耕栽培・アクアポニクスを活用した循環型農業プログラムなど、実践的な学びが多数導入されている。これらの活動を通じて得た収益は地域のチャリティーに寄付され、生徒の社会的責任感を育てている。



アクアポニクスの実習場

特筆すべきは、特別支援教育の充実である。1 クラス 10 名に対して教員 1 名と教育アシスタント 3 名を配置し、感覚統合を促す空間や生活スキルを学ぶ部屋を備えている。特別支援ユニットを持ちながらも、他の生徒と同一キャンパスで学ぶ「インクルーシブ教育モデル」を採用しており、障がいの有無に関わらず共に学び合う環境を形成している。

さらに、敷地内には湿地帯を含む自然保護区があり、クエンダーなどの野生動物が生息している。この生態系を教育資源として活用し、環境保全の重要性を学ぶ機会を提供している。また、第一次世界大戦で戦ったアボリジニ兵士を追悼する庭園を設け、地域の歴史と文化への理解を深めている。

国際交流にも積極的であり、日本からの中高生を定期的に受け入れている。滞在期間中、生徒たちはスポーツ、木工、アボリジニ文化、音楽などの体験を通じて、オーストラリアの多様な文化に触れる機会を得ている。学校関係者からは、日本の生徒の礼儀正しさと積極性への高い評価が寄せられた。こうした取組は、国際理解教育の実践例としても大いに参考となるものである。

おわりに

Kinross College および Lakeland Senior High School の両校に共通しているのは、生徒一人ひとりの個性を尊重し、実践的かつ包摂的な教育を展開している点である。ウェル

ビーイングの重視、職業教育の充実、地域や国際社会との連携といった取組は、大田区の教育施策においても参考となるものである。特に、Kinross College のように「心の健康を学びの基盤とする教育理念」は、区内の学校が直面する不登校・心理的ケアなどの課題にも通じる示唆を含んでいる。今後、こうした海外の先進事例を踏まえ、子どもたちの多様な学びと成長を支える教育環境のさらなる充実が期待される。

大田区立中学校生徒ホームステイ先(ジューンダラップ市内)訪問・調査報告書

団員 大森 昭彦

午後2時過ぎごろにお宅を訪問した。伺った地域はそれぞれの家屋が大きな敷地にたつており、おおよそ平屋の建築か、二階建てのお宅が立ち並ぶ高級住宅街の中の一軒を訪問させて頂いた。

熱烈な出迎えを、ご夫婦揃ってしてくださったことに、一同、大変恐縮しながら部屋の中に通して頂き、改めてお互いに自己紹介をさせて頂いた。マイ・ネームと口にして話すのだが、名前すら言い慣れない中での発声、それだけでも緊張することを覚えたものである。帰国した生徒達による報告会を拝聴しに池上会館を訪れた際、大変立派な英語によるスピーチを聞いてきたのだが、堂々と話す生徒達の様子を想い浮かべ、大変貴重な経験を積み上げ育っていることに、改めて感心させられた場面となった。生徒を預かって頂いているご家庭では、生徒達の生活ぶりに対しでは、なかなか高評価を頂いていた。お迎え頂いた時点では、その生徒も緊張する姿が見られたようだが、一日も経過しないうちに打ち解け、気さくに会話の中に入ってきたようで、若さ・可愛さと好意的に受け止め、賑やかな時間の過ごし方で毎日が楽しく、家族の一員として迎えお世話下さったようだ。こちらのお宅では、色々な場所へ連れて出かけて、ペースの文化ができるだけ体験させようと取り組んで頂いたとの事。ペースの住民の生活自体が、比較的に裕福で余裕をもって生活を営まれていると伺えた。そのことは、実際の街の産業が国力の維持向上に貢献していると言つてよいほど、鉱物資源の産出に対して、相当な功績をあげてきている事が、ペース住民の生活レベル水準を大きく引き上げている事が今回の調査の中で判明し、説明をいただくに至ったからである。平均年収は千五百万円から二千万円（日本円換算）になる家庭が大半であるよう、大型バカンス、休暇を取り旅行したり、クルーザーを持ち、出かけたりと休暇の過ごし方が違うのである。庭がある家に住み、プールも備えている家庭が随所に見られる。生活水準の違いに目を見張つたのである。そういう家庭では、一つの部屋を提供して頂き、自由にリラックスした中で日常を過ごせたようで、とても良いご家庭での経験をさせて頂いたものと理解できた。

日本の学生に対し、ノージー一家ご夫婦の印象を伺うと、とても礼儀正しい生徒、若者であり接していく微笑ましく、楽しさを共有しての時間がとても素敵であると、たいそうお褒めの言葉を聞くことができた。生徒達の姿勢は、多くの事を学びたいという思いが行動の中で感じることができたという。英語の勉強を目指し、オーストラリアにホームステイで来る若者を受け入れて、既に11年目の取り組みとなっているそうで、そういう意味合いではノージー夫妻のお宅は大ベテランのホームステイ引き受け先であったと言える。生徒子ども達の緊張を解きほぐすすべであるとか、色々な経験の中で対応をして下さったようで、大変有難く、日本の家庭に置き換えると、なかなかこうは行かないであろうとさえ

感じたところであった。ホームステイ中、家族と一緒にゲームを楽しんだり、テーブルを囲んで夕食を皆さん家族と過ごす場面に於いて、会話が弾み生徒から感想を聞かせてもらったそうで、事前の勉強で覚えた単語など会話に交え、また二人がお互いに助け合いながら会話をこなしていたようだ。そんな様子も和やかな雰囲気を醸し出すのに大いに影響したのではないかと感じられた。ペースの住民の方達の住戸は、一様に皆、広い土地に家が建っているように見えた。これは車窓から見える景色として、住宅街の中を通過した折、殆どの家屋が平屋作り、もしくは一部二階部分が備わった家の作りになって居たことに気が付き、土地の広さゆえに家や、学校なども、ほぼ平屋作りになって居た。このことは家の中に居ても風の通りがよく、日本のように湿気がないことに感心させられた。11月の5日の訪問であったが、とても天気が良く、合わせて湿気を感じさせない爽やかな風がとつても心地良かったのである。街全体として風通しがいいように感じられた。そういった環境で生活の時間を共有できたことに、生徒達が過ごした時間がとても有意義であったことに、ホストファミリーへの訪問と、そこで得られた会話の中で、とても友好的であるペースの人々の存在、むしろ生徒たちから得られる日本の文化と交流ができる事に、とても好意的に考えて下さっているのだと受け止められた事は、とても良い収穫であった。我々訪問団に於いて、地球を9000km程の移動で、しかも南半球に出かけたことでは、時差が1時間ほどしかない国への訪問調査に参加でき、距離は沢山あるものの、日の出、日の入りの時間、昼と夜の時間の過ごし方が日本と変わらないことに、とても体力的な負担がないものであることを実感させて頂いた旅であった。この事は、英語圏であること、大田区の中学生の生きた英語学習、更に生活の中で得られる体験学習に訪問団一同、この事業の有意義性を感じたのも事実である。ノージー家の訪問では、家の中を案内して頂き、生徒たちを迎える部屋や、シャワールームなど設備的な備えなども案内して頂き、皆での集合写真を撮らせて頂いて、改めて感謝と御礼の挨拶を申し上げ失礼した。

次に、二件目のホームステイ先であるホストファミリー、McCulloch（マカロック邸）を訪問した。

我々が到着するのを待っていて下さり、またも熱烈な歓迎を頂戴した。オーストラリアの方達は親日的であるとさえ感じさせられた。先ずは通されたリビングにて挨拶を交わし、訪問団長からは大田区の中学生を快く受け入れて頂き、感謝と御礼を申し上げたいとお伝えした。まだまだ英会話が上手にこなせるようなレベルの生徒達ではない中で、ホストファミリーとして生徒達を受け入れて下さった事に感謝申し上げた。マカロック家ご夫婦に於かれては、以前にも日本の若者をホームステイでお世話したことがあるご家庭であった。今回、本区の生徒達の印象はやはり礼儀正しく、とても良い子たちであったことにとても喜んで下さった。一様にとても評価が高い生徒達であった。ノージー家ご夫妻もそうであったように、マカロック夫妻も若い子たちが傍にいてくれる空間を持てる事に、喜びや楽しさを感じてお世話下さったり、一緒に行動したりと自らの生活に溶け込みながらホームステイを受け入れることに馴れ、またその出会いを楽しんでおられるご家庭であると

感じた。マカロックファミリーに於いても、家の中での過ごし方は、生徒達専用の部屋を提供して下さっていて、なに不自由なく過ごせるようにご配慮頂いていた様子を拝見する事ができ、お世話になった生徒達が家族の一員として溶け込みながらオーストラリア・パースでの滞在中、その文化や民族、人間性、生活習慣、または社会経済の一部を経験させてもらい、中学生時代の貴重な経験を積むことになり得たことと、理解したところである。我々がパースを訪れる前に、ホームステイでの経験を報告する会に参加させてもらい、そこで生徒達が英語による報告スピーチが行われたことを見て、聞いて来たことをマカロック夫妻にお伝えして、生徒達がとても大きな体験ができたことに対する喜びや、国際感覚を身に着けて帰国してきたような印象をお伝えすると、とても喜んで下さり、ホームステイが終わり、別れの場面となった折にはすっかり打ち解けていた、むしろ家族の一員の別れのような思いで寂しさが込み上げてきたとのお話だった。とても良い家庭環境で生活できた生徒達のパースでの時間では、我々訪問団一同、有意義な英語圏に於ける、大田区中学生派遣事業であったと言う事について、今後の本事業の展開に期待を持つに至った。最後に海外派遣される生徒には、バスタブシャワーを洗い場で使わない事と、お土産購入のお小遣いの、ドル金種の使い方など指導に加えられた方が良いのかと考える。

ロットネスト島の視察・調査報告書

団員 須 藤 英 児

I ロットネスト島の概要

ロットネスト島はオーストラリア大陸から約 19km に位置し、東西 11km、南北に 4.5km、面積は東京ドーム約 380 個分、平坦な島で最も高い場所で海拔 46m。地中海性気候で温暖、乾燥した夏とやや湿潤な冬がある。ロットネスト島とオーストラリア大陸は 7,000 年前までは地続きであったが海面上昇に伴い大陸と島に分断され、以来、独自の生態系を育み、現在に至る。特異な自然環境で、生物多様性においても重要な保護地域であり、ロットネスト島全体が A 級自然保護区に指定されている。

ロットネスト島は 1838 年から 1931 年にかけて流刑地として使用され、約 3,700 人の先住民が島に収容された。第二次世界大戦中は敵国からフリーマントル港を守る事を目的に鉄道が敷かれ大砲などの軍事施設が造られた。現在はパース市民の憩いの場で空港もあり、セスナ用の空港やドクターヘリ用のヘリポートもある。

II ロットネスト島の野生生物を知る

①ミサゴ(オスプレイ)

肉食性で主に魚類を食べる。獲物を見つけると素早く翼を羽ばたかせて空中に静止するホバリング飛行を行った後に急降下し、水面近くで脚を伸ばし両足の爪で獲物を捕らえる。

②クオッカ(クアッカワラビー)

クオッカは、発達した口角筋により、あたかも笑顔でいるように見えることから「世界一幸せな動物」と言われロットネスト島の人気者。ロットネスト島内には 8,000 から 10,000 匹が生息している。クオッカは哺乳類であるが、カンガルーやコアラと同様に腹部にある袋状の器官・育児嚢で子どもを育てる有袋類である。ロットネスト島の乾燥した荒地の環境に耐えて生息することが出来るが、危機感がなく猫にも捕食されてしまうほど弱い。



ロットネスト島内のクオッカ



ロットネスト島内の塩湖

◇クオッカに触れたり、食べ物を与えたりしてはいけない理由

- クオッカはサルモネラ菌など有害な細菌を保有している可能性があるため。
- クオッカは本来、草食性で植物を主食とし、植物から栄養分を取るための消化器官を持ち、人の食べ物を摂取する事で病気になる。

③ロットネスト島内の植物

ヨーロッパ人の入植が始まった 1831 年以前は、ロットネスト島の半分以上は森林に覆われていた。開拓によって皆伐地や道路が造られ、さらに製塩のための燃料として島内の樹木が利用され森林が伐採され景観は変化した。現在、森林は散在し島の約 4 % を覆うのみである。現在、自生する樹木はロットネストアイランドパイン、ロットネスト・ティツリーなど貧栄養土壌、乾燥環境に強い植物である。

④ロットネスト島のピンク色の塩湖

ロットネスト島の塩湖の一部がピンク色に変わるのは藻類と動物プランクトンが原因である。ロットネスト島内には 12 の塩湖があり、海水の 4 倍の塩分濃度の塩湖もある。

III ごみの問題を考える

ごみを分別し、誰が出したか、どこから来たかなど、ごみについて考える

◇ロットネスト島でのごみの分別・処理の取組み

ロットネスト島の各所にごみ箱が置かれ、赤色のごみ箱は一般ごみ、黄色のごみ箱はリサイクルごみと、誰にでも分かりやすく分別出来るようになっている。

①赤色のごみ箱

一般ごみとして回収され、ロットネスト島内で圧縮処理をした後、毎日、専用のごみ運搬船によりオーストラリア大陸のロッキンガムのごみの埋め立て地に送られる。

②黄色のごみ箱

回収されたリサイクル資源は、キャンニング・ベールにある施設に送られる。

③植物性のごみ

落ち葉、木の枝、枯れた植物、花壇の古い花・根などの植物性のごみは堆肥化されるか、島内でチップ化・堆肥化して再利用される。

④リサイクル容器回収・返金プログラム

西オーストラリア州全体で行われている取組で、ペットボトルや空き缶、空き瓶をリサイクルセンターに持っていくと、1 本につき 10 セントの返金、または募金が出来る。

⑤ビーチクリーンアップ

様々な団体が社会奉仕活動として参加するビーチクリーンアップ活動は、特別なビーチクリーンアップキットが渡され、ごみを回収し、海洋ごみのデータも提供される。

⑥植樹と除草の活動

年に数回、ボランティア週間が設けられ、週末を利用してロットネスト島に宿泊し、植樹や除草などのボランティア活動が行われている。



ロットネスト島でのソーラーパネル発電



ロットネスト島内のごみ箱

◇ロットネスト島のビーチクリーン活動での注意点

①ヘビに注意

ヘビと遭遇した場合、距離を取り、ゆっくりと離れる。

②砂丘に入らない理由

ヘビとの接触を避けるため。砂丘の崩壊を防ぎ植物や地形を守るため。

③ごみを分別して袋に入れる。

リサイクル可能なごみは資源として、再利用可能な麻袋・白袋に入る。その他の一般ごみはオレンジ色のごみ袋に入る。

④集めたごみは必ずごみ箱に捨てる

一般ごみ箱(赤色のごみ箱)、リサイクル用ごみ箱(黄色のごみ箱)は島内の各ビーチの出入り口に設置されている。

⑤ごみがごみ箱に入りきらない場合

ごみ箱の横にまとめて置く。ごみ拾いキット返却時に追加のごみがあることをスタッフに伝えてスタッフが回収する。

⑥使用した道具は全てごみ拾いキットに戻して返却する

ごみ拾いキットはロットネスト島ビジターセンターに返却する。

◇拾ったごみから考える

①海流、風向き、道沿いなど、ごみがやって来たルートを考える。

②プラスチック類、ガラス類、金属類、紙類、漁具・釣り用品、その他など、ごみを素材別に分けてどんな素材のごみが多いのかを考える。

IV拾ったごみについて他の班と比較しあって共通点・相違点を見つけるなど考える

③海洋ごみの動物・植物へ与える影響を考える。

④ビーチクリーン活動の経験後の気づきや各自の変えたいと思う行動を書き出し考える。

V電力の需要と供給について考える

ロットネスト島では、島内で必要とされる電力のうち、15%を太陽光発電により、30%を風力発電により、合計約45%を再生可能エネルギーで賄っている。残りの55%は軽油を用いたディーゼル(軽油)発電により賄う。

①太陽光発電

600KWを出力できる8,000枚のソーラーパネルを2017年から稼働。

②風力発電

1基で600KWを出力できる風力発電システムを2基設置。

③ディーゼル(軽油)発電

太陽光発電や風力発電で足りない電力はディーゼル発電で賄う。

◇海水から淡水を精製するための電力

ロングリーチ湾より汲み上げられた海水は、風力や太陽光により生み出された電力を使い1日約500トンの海水が淡水に変えられ、飲み水などに利用されている。

VI大田区にどう活かすか

大田区の中学生が体験したビーチクリーン活動の資料を熟読し、ロットネスト島内各所にあるごみ箱の配置を確認した。各所に赤色のごみ箱(一般ごみ)、黄色のごみ箱(リサイクル資源)が置かれているため、道路や休憩所などで落ちているごみを目にすることができた。大田区の中学生は海流に乗って世界中から運ばれ、ビーチに打ち上げられたごみを分析し皆で考えた。この事は環境保護や持続可能な社会づくりを考えるうえで意義があり貴重な体験であったと考える。

かつては島の半分以上は樹木に覆われていたと言われるロットネスト島、現地の光景はまるで高山に居るかの様で、少ない低木と多くの草本類に島全体が覆われていた。植樹や除草などのボランティア活動の努力は各所で見られるが、乾燥と強風、貧栄養土壌の環境を考えると元の環境を復元するためには百年単位の時間が必要であると考える。池上本門寺周辺や佐伯山緑地などの大田区内の貴重な樹木の保護に努めなければと強く感じた。失われた自然環境の回復は困難であるため、大田区内に残された樹木の保護に努める。

日本における令和7年の10月末までの熊による死者数は12人、日本各地で熊による人身被害が発生し大問題になっている。大田区内でもハクビシン・アライグマ、タヌキなどによる家屋への浸入被害などが問題となっている。人と野生生物が適度な距離を保つ事は野生生物保護のためにも重要である事を多くの区民に伝えていく。

参考文献

①GOLD社「ロットネスト島環境学習ワークシート」

②目で見る世界の森林(39) ロットネスト島の森林(西オーストラリア)

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjiff/113/0/113_33/_pdf/-char/ja

パース市のまちづくり・キャットバス・熱波(暑さ)対策についての調査報告書

団員 須 藤 英 児

I 西オーストラリア州パース市

西オーストラリア州はオーストラリアの西側にあり、オーストラリアの面積の3分の1を占める。しかし、人口はオーストラリア国内の約10%の約266万人で、州の南西部に人口が集中している。原油及びコンデンセート、天然ガス、ニッケル、金、鉄、ボーキサイト、ダイヤモンドなど鉱物資源が豊富で、西オーストラリア州の住民の所得は高く、州政府も財政が豊かであり、移民も増えていて人口増に伴う住宅不足が問題である。

州都であるパース市は「世界で最も美しく住みやすい街」と言われ、街の中心を流れる最大幅4km・最深200mのスワン川はインド洋に流れ、高層ビルと共に中世の歴史を感じる街並が共存している。温暖な気候で、日本との時差は1時間と少ないため日本からの旅行者にとっても過ごしやすい場所である。パース市は直近5年間、着実に人口が増えており2019年は約209万人だった人口は2023年に約231万人に達している。



パース市中心部とスワン川



パース市内・高速道路と鉄道

街中には連結バスや無料であるキャットバスが運行し、鉄道の両側を高速道路が通り、巨大なスタジアムや駅前商業施設の賑わいには驚かされた。都市の中心、周辺共に自転車専用レーンが設けられ、ヘルメット着用義務の中で、自転車の走行が各所で確認できた。マリンスポーツ愛好家が多いため、船舶を庭先に置く住宅を多く見ることが出来た。

II パース市のまちづくり(自然環境と都市の調和、紫外線・乾燥対策)

まちづくりのコンセプトは「人々が豊かで、災害や社会の変化にも対応できる都市空間」と「自然との共生」である。パース市の長期戦略や戦略的コミュニティの計画は、都市の活力・居住性・持続可能性を高めることが掲げられていて、公共空間の質、歩行性、気候変動に対応した環境への配慮を優先している。

2036年までの目標には都市緑化が掲げられており、都市を「緑地で涼しく、憩いの場」に転換する計画を進めている。加えて、スワン川やキングス・パークなどの歴史的景観や地域の自然を都市のアイデンティティとして据え、それらを市民生活・観光・レクリエーションの資源として保全・活用する方針が明確にされている。

パース市のまちづくりにおける「自然環境と都市の調和」への取り組みは、都市緑化、街路樹・屋上緑化、樹冠率の向上、在来種重視の植栽の多様化による、ヒートアイランド対策と生物多様性向上を体系的に進めている。目標年次や優先種・優先エリアを明示している点も特徴的である。

水循環に配慮し、豪州西部の乾燥気候を踏まえ、雨水の利用・排水路や貯留設備、透水舗装を導入し、洪水リスク低減と乾期の水利用化を図っている。

キングス・パークにおける大規模緑地保全は、文化的価値と景観、余暇の活動、都市冷却効果など自然の恩恵を維持するため、保全管理している。古い街並みと新しい建築物の調和を実現する為の規制は、西オーストラリア州レベルでの制度と条例の組合せとパース市の登録制度により、文化財登録建物や保全地区での改修・再開発に対する審査・許認可基準が設けられている。登録建物は事前の承認が必要で、外観・素材・全体のバランス等について基準がある。設計基準による適合性や評価は、残すべき価値のある建物の外観を保ち、高さ・セットバック等の規制があり、色彩・規模などの基準もある。保存が必要な部分を残し、内部の機能は近代化する手法が採られ、州や市が指針を出している。

実例としてスワン川流域にあるエリザベス・キーは、2016年以降に再開発され、街と川を結ぶ観光地として注目を集めている。歴史的視点・景観に配慮し、新たな公共空間と建築物を組み合わせることで都市の魅力を掘り起こしている。

IIIパース市のキャットバス

パース市中心部には、キャットバスの無料乗降場所があり、区域内を運行するキャットバスは無料で乗降出来、運行管理と便益の品質は州の公共輸送機関が関与し、委託された民間事業者が公共交通機関として運行している。路線によって青、赤、黄、緑、紫と5路線が色分けされている。路線や曜日、時間帯により運行間隔は変わり、5分から15分間隔で運行している。

キャットバスの運行経費の主たる財源はパーキング課金で、市内の非住宅用駐車スペース所有者に課される罰則的課金は、公共交通やキャットバスに活かされ、路線延伸や夜間運行拡大も図られている。市中心部の短距離移動を無料にすることで、パース市民や観光客、双方の移動手段や利便性の改善がされ、自動車依存を減らし、買い物・観光目的の歩行者を増やし、パース市中心市街地の回遊性を高め、夜間経済の活性化にもつながっている。キャットバスの運行は広がり、利用者も増えている。

交通政策的効果としては、短距離の自家用車利用を抑制することで交通渋滞が緩和し、駐車場が不要になり、CO₂排出抑制に貢献している。安心して移動出来、観光客の夜間の

回遊性も上がり、商業の活性化にも繋がっている。

①レッドキャットはパース中心部を東から西に移動できる巡回ルート。②ブルーキャットはノースブリッジやベルタワー、エリザベス・キー方面のルート。③イエローキャットはウォータータウン・ブランド・アウトレット方面のルート。④グリーンキャットはキングス・パーク方面のルート。⑤パープルキャットはエリザベス・キーを起点として、西オーストラリア大学周辺を回るルート。



パース駅周辺・自転車優先エリア



パース市内を運行するキャットバス

IV パースの熱波(暑さ)・紫外線対策

パース市は南半球に位置するため日本と季節が逆で、大田区中学生派遣時の7月は真冬に当たり、真夏である1月・2月は最高気温が35°Cを超える猛暑日もある。パース市は一年を通して紫外線が強いため冬でも紫外線対策が必要であり、日焼け止め・日傘の使用、帽子・サングラス・長袖着用などの日よけ対策が重要で、屋外では特に注意が必要である。ロットネスト島の視察時は長袖服・帽子・サングラスを着用し、日光を避けて行動していたが、日焼け止めを塗り忘れた為か顔や手など露出していた部分は日焼けをした。

「紫外線量が日本の4倍以上だから気をつけろ」との忠告が理解出来た。

暑さのアラートは西オーストラリア州保健省が州全体を統括し、「いつアラートを出すか」「どう伝えるか」は民間の気象予報システムと気象庁・州の警告システムなど、州・自治体・民間が連携して行い、アラートを受けた市民各自はそれぞれで対策を取る。

西オーストラリア州では「Australian Warning System (AWS)」という州統一の警告の枠組みがあり、極端な暑さ(heatwave)はこのシステム下で警告され、警告レベルには以下のような区分がある。①注意報レベル→今後数日、暑さが続く→注意しろ。②警報レベル→脅威が増している→行動開始しろ。③緊急警戒レベル→高温による健康への重大なリスクがある→直ちに行動をとれ。

暑さに対する対策としてパース市では、屋外労働者や高齢者・持病のある人へは、水の配布、公共のクーリングスポット(涼みどころ)設置、安否確認支援などを行った実例があ

る。西オーストラリア州の保健機関のウェブサイトには、熱波中だけでなく「熱波の前・最中・後」での過ごし方のガイドライン(冷房の使い方、食事や水分、ペットの管理、電気・冷蔵対策など)が公開されている。

温暖化防止のための環境対策などの「緩和対策」については、植樹や水の有効利用など、パース市の「自然環境と都市の調和」を意識したまちづくりが行われ、市民意識の高さを理解することが出来た。暑さと乾燥には地球温暖化が関わっている。

V 大田区に活かす

大田区においても「自然環境と都市の調和」は重要で、都市緑化、街路樹・屋上緑化、植栽の多様化によるヒートアイランド対策と生物多様性向上を体系的に進めていく必要がある。透水舗装・雨水の貯留設備を導入により、洪水リスク低減とともに、水循環による都市の冷却も考えるべきである。

キャットバスによる良好な交通環境の整備は、巡回型でふらっと乗れ、歩行者と自転車と公共交通の調和のとれたまちづくりに繋がっていた。大田区内でも要望の多い、公共交通空白地域でのコミュニティバス運用に向けて、安全性や経済活性化など多くの視点を取り入れ検討すべきである。

参考文献 参考資料

- I © 2017 西オーストラリア・パースに行こう！ <https://perth.mospra.com/>
- II パースの街づくり・熱波(暑さ)・紫外線対策調査資料 (GOLD 社調べ)
- III 「暑さ」という災害に備える～気候変動と防災の最前線～ 出典：国立環境研究所・岡和孝 提供資料

在ペース日本国総領事館訪問・視察報告書

団員 大森昭彦

1. はじめに

本報告書は、令和7年11月6日、西オーストラリア州ペース市所在の日本国総領事館を訪問し、領事の廣嶋絵梨氏および首席領事の長谷川大輔氏から伺った内容を整理したものである。今回の訪問は、本年度より初めて実施されたオーストラリアへの中学生海外派遣事業について、安全面・現地受入体制・地域特性・危機管理に関する知見を総領事館側から得ることを主な目的として行われたものである。

本年度はペース方面が初めての派遣先となったこともあり、現地行政との連携や医療・治安状況など、事前に十分な理解が求められる分野が多い。総領事館の持つ広範な情報や危機管理経験は、今後の継続的な派遣の質を高めるうえでも極めて重要であり、本訪問は大田区の国際教育事業にとって大きな意義を持つものであった。

2. 対応いただいた総領事館職員について

今回の面談では、広報活動と文化交流に関する部門の責任者、廣嶋領事と、西オーストラリア州全域の政治・経済・社会情勢に通じる長谷川首席領事の2名がご対応くださいました。説明は主に長谷川氏から行われ、現地の治安や社会構造の理解に加え、生徒派遣における危機管理の考え方など、行政として特に留意すべき事項を体系的にご教示いただいた。

総領事館は、州内に居住する約8,600名の邦人を守るための中心的拠点であり、警察・病院・学校など現地機関との緊密なネットワークを有している。長谷川首席領事からは、「領事館は緊急時に邦人を支援するための重要拠点である」旨の説明があり、生徒派遣で万が一の事態が発生した場合にも迅速な支援体制が確保されていることを改めて確認できた。



総領事館が入居する建物

3. 大田区の学生交流プログラムと今回の訪問の背景

大田区では長年、米国セーラム市およびドイツへの中学生海外派遣を行ってきたが、コロナ禍で交流が困難となり、一旦派遣事業はストップしていた。その後派遣先の再検討が行われ、その結果、英語圏であり時差も少なく、安全面や教育環境が安定しているペース

地域が候補に挙がり、さらに区長・教育長による先遣調査を経て、ジューンダラップ市内の学校での中学生受け入れが決定した。

同市は教育水準が高く、治安面でも比較的安定していることから、中学生の派遣先として適切であることが確認された。今回の総領事館訪問は、初の派遣を踏まえ、来年度以降の安全体制強化や行政間調整の手法を検討するうえで必要不可欠な位置づけとされたものである。

4. 西オーストラリア州の概要

説明によると、西オーストラリア州はオーストラリア全土の3分の1を占める広大な州である一方、人口は約280万人と少なく、その内約230万人がパース都市圏に集中している。面積の大きさに比して人口密度が極端に低く、広大な州内では沿岸部に小規模都市が点在する構造となっているのが特徴である。

ジューンダラップ市はパース近郊の新興住宅地として発展してきた地域であり、教育水準や所得水準が比較的高いミドルクラス層が多く居住している。現在は、パース中心部で働きつつ、近郊の住宅地に住むというライフスタイルが広がり、ジューンダラップの人気も高まっているという。治安も比較的良好であり、生徒派遣には適切な環境であるとの評価が示された。

5. 西オーストラリア州の経済構造

同州は鉄鉱石とLNG（液化天然ガス）の生産・輸出を主産業とする典型的な資源州である。鉄鉱石は中国向けが約半分、日本向けが約10%を占め、州経済を支える基幹産業となっている。人口規模が小さい中で巨大な資源産業が存在するため、一人当たりGDPは全国的にも突出して高い水準にある。

こうした豊富な税収により、州は財政的に安定しており、近年は年間約3,000億円規模の黒字を計上するなど、充実した公共サービスの提供が可能となっている。

6. 西オーストラリア州が抱える社会課題

他方で、近年の人口増加により住宅不足が深刻化しており、家賃上昇が続いている。また、医療分野では専門医の確保が難しく、診察まで数ヶ月待ちとなるケースもある。こうした状況は地理的隔絶性に起因するもので、建築資材や医療人材の確保が容易でないことが背景にある。生徒派遣においても、こうした医療アクセスの遅れを見込んだ上で、軽度の体調不良時点で早期に対応することが重要との助言を受けた。

7. 治安状況について

治安については、「日本と同程度の安全を期待すべきではないが、外国としては比較的安全な地域である」との説明があった。車上荒らしなどの軽犯罪は一定数存在するもの

の、凶悪犯罪は多くない。基本的な防犯意識を持つことで、安全性は十分に確保できるとの見解が示された。

ジューンダラップ市では防犯カメラ設置助成制度の推進など、地域全体で治安向上に取り組んでいる点が評価され、生徒受入地域としても適しているとの判断を再確認した。首席領事からは、治安を判断する際には統計だけでなく地域ごとの特性や時間帯など“質的な治安”を見る視点が重要であるとの指摘もあった。

8. 産業多角化と日豪関係

同州では、資源依存からの脱却を目指し、防衛産業の育成を進めている。AUKUSに基づく原子力潜水艦関連の基地整備や、日本の護衛艦技術を取り入れたフリゲート艦建造、クリティカルミネラル（重要鉱物）の精製事業など、複数の大型プロジェクトが進行している。

教育・文化面では日本語学習者が多く、日豪の学校間連携も盛んである。大田区の中学生派遣についても、現地の日本理解を深める観点から歓迎されている。

9. 日本との経済・人的交流

西オーストラリア州には約 90 社の日本企業が進出し、資源・エネルギー関連の企業が中心である。在留邦人は約 8,600 人で、永住者約 6,000 人、企業駐在員約 2,000 人とされる。州首相の訪日や日豪経済会議の開催など、経済・人的交流はますます活発化している。

10. 救急医療体制と留意点

オーストラリアでは救急車は病院所有で、公的医療として無料ではない。救急車利用に 10 万円程度かかるケースもあり、派遣生徒の緊急医療保険加入は必須となる。トリアージにより緊急性が低い場合は対応が遅れるため、現地では早めの受診判断が重要となる。

11. 航空アクセス

日本とパースを結ぶ直行便は現在週 3 便で、12~4 月の繁忙期は毎日運航される。安定した航空アクセスは派遣事業の継続にとって大きな利点である。

12. 総領事館との連携と今後の支援

長谷川首席領事からは「生徒派遣で不安があればためらわず連絡してほしい」との心強い言葉をいただいた。総領事館は、警察・医療機関、学校関係者、ホストファミリーとも必要に応じて連絡・調整を支援いただける体制を有しており、大田区の派遣事業を支える、大きな力となる存在であると確認ができた。

13. まとめ

今回の総領事館訪問は、初年度派遣の振り返りと、次年度以降の事業運営の改善方策を検討するうえで、非常に実り多いものであった。現地の治安・医療・経済などの実情を総合的に把握できたことに加え、総領事館としての危機管理姿勢や支援体制を直接確認できたことは、今後の事業運営に大きな安心感をもたらした。

「必要な対策を講じれば、パースは教育交流に適した地域である」という旨の首席領事の言葉は、事業継続に向けた大きな指針となった。今後も総領事館と緊密に連携し、大田区の国際教育事業を発展させる取り組みを継続していきたい。



面談後、長谷川首席領事と撮影

おわりに

副団長 大橋 たけし

今年度から大田区立中学校生徒海外派遣先となったオーストラリアパース市、ジューンダラップ市、コバーン市へ、大田区の子どもたちがホームステイを含め12日間お世話になる派遣事業にあたり、迎え入れて下さる関係各所へ御礼とともに、安全と安心の確認、そして今後の繋がりや、防犯対策、交通やまちづくりなど、鈴木団長を中心に5名の派遣団で、大田区議会を代表し現地調査に向かった。

西オーストラリアは、日本が5つ入る程の広大な国土に約8割の人口がパースに集中していると言われるほど、大都市である。

日本（成田）からの飛行時間は約10時間と長時間フライトだが、時差は日本と1時間しか変わらないため、中学生生徒の体の負担も少ないと感じる。

主な産業は鉱山や資源エネルギーなど、とても恵まれている環境から州の財政はとても裕福であり、広く高級住宅街が続くような環境とともに、自然豊かで、市内は交通の便も良く、とても住みやすい印象を受ける。

まず初めの訪問は、この度ジューンダラップ市の市長にご就任されたダニエル・キングストン市長を表敬訪問し、市長自らお出迎えをしていただき心からの歓迎の意を感じた。鈴木団長から団を代表し、就任のお祝いのお言葉、また大田区中学生生徒の受け入れのお礼を述べ、今後も子供たちの受け入れ等お願いすると、市長の頷きながらの温かい笑顔がとても印象的であった。団長をはじめ我々団員とも固く握手を交わし、会談も当初の予定時間より長く、とても有意義な会談となった。

その後の市の防犯対策についても丁寧に取り組みをご説明頂き、市の職員そして現地警察とも繋がりが出来たことも大きな結果である。

市庁舎を出て、子どもたちが訪れた現地校キンロス・カレッジを訪問し、副校長先生はじめ教職員の方々が温かく迎え入れてくださり、様々意見交換を行う。多くの選択コースがあり、パイロットや科学者、技術者、医療、法律、スポーツアカデミーもあり、多くの人材を育て輩出されており、学校の方針として、どんな子どもたちも置いていかれないよう取り組みをしていると言う、素晴らしい学校である。今後、大田区の子どもたちの受け入れについても笑顔でぜひとと快くご返答をいただく。

学校を後にし、ホストファミリーのお宅2件訪問を行う。まずホストファミリーのご夫妻の温かさを感じ、会話を交わす中で、子どもたちを受け入れることへの喜びが伝わってくる。この度受け入れてくださった大田区の子どもたちの印象を聞くと、とても良く、礼儀正しく純粋で素直な子どもたちとの感想を笑顔で言われ、とても喜んでおられた。また子どもたちが泊まらせていただくお部屋も拝見させていただいたが、とても広く清潔で可愛く十分な環境であることが確認出来、周辺も高級住宅街であり整備された安全な環境が

確認することができた、今後の受け入れについても満面の笑顔で喜んで受入れして下さる気持ちをお答えくださいたのが、とても印象的であった。こうしたホストファミリーの方々や周辺の安全なども、現地法人ゴールド社のご尽力により、安全と安心のため厳しい審査や取り組み、またホストファミリーとの信頼関係も改めて確認出来、安心して中学生を派遣できる確認が取れた訪問となる。

次に、子どもたちが訪れる美しい自然と、世界一幸せな動物と呼ばれるクオッカと言う動物が生息する自然保護区に指定されている島、ロットネスト島を訪れる。島まで行く船は大きく安全性も高く、これまで事故もなく、船内では救命胴衣の説明、また安全のため常に見守りも行っており小さなお子様から高齢者まで多くの方々が安心して乗船をされている。

また島はとても美しく、世界一幸せな動物クオッカを目の前で見ることができるなど、子どもたちの喜びと感激する顔が思い浮かぶ環境である。また環境対策として水不足の対策、自然環境保護の取り組み、太陽光やエネルギーの活用、戦争の歴史など、地球環境について多くのことを学べる島であることを確認できた視察となる。

パースのまちづくりについては、歴史と近代化の融合そして洗練された素敵なまちである。大きなまちづくり開発をおこなっており、バリアフリーで、ほとんど無電柱化で見通しもよく、街路樹や緑、公園も多く、美しいデザイン性のある街である。交通も無料で乗車できるバスや、高速道路と並行して走る鉄道、水上バスや、高速道路は無料など、とても利便性もよく、住みやすく景観も考えた街づくりをしており、場所によっては企業も出資して一緒に街づくりをしている。

大きなシンボルとなるオブジェも人々が集う効果と結果が出ており、まちづくりについて、とても勉強になる調査となる。

最終日、パース都市圏コバーン市にある現地校レイクランド・シニア・ハイスクールを訪問、大田区中学生は訪れていない新たな学校になる。

到着すると、校長先生が明るく笑顔で迎え入れてくださる。校内を見学させていただきながら取り組みのご説明をいただく。校長先生は歴史学に詳しく、オーストラリアでも歴史学でご活躍されていらっしゃる方であり、校長先生の言われた「歴史は生き生きとしてなくてはならない」との言葉は印象的であった。校内には先住民のアボリジニを記念する広場があるなど、歴史、文化、芸術、音楽などの取り組みと共に、驚いたのは、専門的なコーヒーを入れる機械があるなど、お聞きするとコーヒーを作る技術と、ホスピタリティ（心からのおもてなし）も勉強している。同じく美容について技術を学び、さらに受付を設置し接客も学び社会に出て活躍できる実践的な勉強をされていた。

また農業にも力を入れ、魚の排泄物から植物が栄養を吸収し、植物が水を浄化して魚がいる水槽に戻す「アクアカルチャー」にも取り組み、育てた野菜は募金活動に活用されていること、こうした1つ1つの教育、取り組みが、子どもたちの成長そして可能性を開く教育に向けて取り組んでいることが分かる。

また教室を回ると、自閉症の生徒などがクールダウンできるリラックスルームもあるなど、様々な子どもたちの状況でも共に学べるインクルーシブ教育にも力を入れている。また学校では生徒に朝食を無料で提供し、金曜日は生徒が大好きなパンケーキということで校長先生もニコッとされていた。

校長先生からは貧困の子どもたちにも「平等の教育」が必要、「社会平等」が理念との言葉にはとても感動をする。限られた時間内での調査であったが、とても参考になる視察となる。最後に校長先生からぜひまたお越しくださいと笑顔でお言葉をいただく、大田区の子どもたちにとっても、とても良い学校であると感じる。

行程の最後に日本総領事館を訪れる。厳重なセキュリティの中、館内に入り、首席領事から西オーストラリア、パース市の治安や交通、インフラや市民生活、産業、医療、環境、日本との歴史や繋がりなど様々具体的にお話しをいただき現状が良くわかる。

大田区中学生派遣事業において、生徒が安全で安心して滞在できるようお願いと話をして、首席領事からは今後来られる際は、ご連絡いただければお子様が滞在される区間の領事担当とも連携を取り見守っていただける心強いご返答をいただく。

今回、実質3日目には帰国の途につくという限られた時間内での調査であったが、大田区の子どもたちの安全・安心、また今後に向けた繋がりや取り組みに向けて、1つ1つが成果ある調査内容そして結果を得ることができた調査となる。

これもご尽力いただきました各関係者の皆様のおかげであり、心より深く感謝申し上げる。ありがとうございました。

この第1回目となる西オーストラリアへの調査訪問が、今後大田区の子どもたちの大きな成長と共に、大田区と西オーストラリア（パース市、ジューンダラップ市）との友好と発展に繋がることを期待し、おわりの言葉とする。誠にありがとうございました。